

### 第三章 ヴァルプルギスの夜祭りと異界

浜本 隆志

#### 一 ケルトの祝日とベルティネ祭

ケルトとキリスト教の祝祭日 ヨーロッパ中央部の古代ケルト民族は、およそ紀元前八世紀から六世紀までにはハルシユタツト文化を、紀元前三世紀から一世紀ごろにはラテーヌ文化をつくりあげ、アルプス以北で興隆期を迎えていた。また北方のゲルマンや地中海地域のローマ文化、キリスト教との接触によって変容をとりつつ、独自のアニミズムにもとづく汎神論的なケルト文化を打ち立てた。

やがてしだいにケルト文化は衰退期に入り、かれらはヨーロッパの周辺部やイギリスのウェールズ、スコットランド、そしてアイルランドへ追いやられるという歴史をたどる。これらの地域でグリーンマン、ケルト神話伝説、網目模様のケルト美術など、特徴的な島のケルト文化をつくりあげたことはよく知られている。では以下において、ケルトの祭りを中心にその習俗の本質を検討してみたいと思う。

すでに触れたように、古代ケルトでは一年を二つに分割し、季節を冬と夏に分けていた。どうしてこのような区

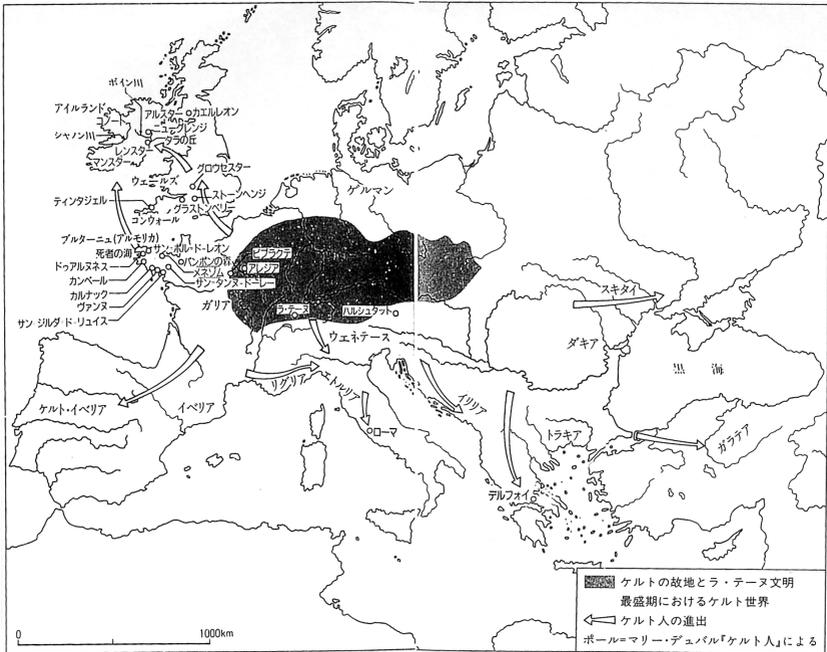


図3-1 古代ケルトの歴史地図(21世紀研究会『民族の世界地図』)

分をしたのであろうか。牧畜を中心に農耕も営んでいたかれらは、草が茂り、家畜を戸外へ放牧する時期や、種を植え芽吹きから繁茂する時期を夏とみなし、穀物を収穫し、草が枯れ、家畜を小屋へ入れる時期を冬としていたからである。

ケルト人たちはこのように一年の区分を生活のサイクルによって決めており、その転換点をサウイン（ハロウィーン）とベルティネ（ヴァルプルギスの夜祭り）といった。前者は新年の祭り、後者は六カ月後の夏祭りであった。かれらはすでに月や太陽の運行による暦の知識をもち、太陰・陽暦を用いて、さらにおよそ二ヶ月間隔の祭りを設定していた。ケルトの年中行事とキリスト教行事との関係をまとめると、次のようである。

サウイン（ハロウイーン）	……一〇月三一日、諸聖人の日の前夜祭
ユール	……一二月二一日、冬至祭、聖トーマスの日、後にクリスマスに収斂
インボルグ	……二月二日、聖母マリアのお清めの日
オスタラ	……三月二一日、春分の日、復活祭
ベルティネ	……四月三〇日、ヴァルプルギスの夜祭り、メーデーの前夜祭
リタ	……六月二一日、夏至祭、聖ヨハネの日
ルーナサ	……八月二日、聖ブリギッド祭
マボン	……九月二一日、秋分の日、使徒マツトホイスの日

ケルトではこのうち、ベルティネとサウイン（ハロウイーン）が主な祭りであった。これらに対応する現在のメーデーとその前夜に祝われるヴァルプルギスの夜祭り、諸聖人の日の前夜のハロウイーンは、もともとキリスト教ではなく、異教（ケルト、ゲルマン）の祭りをルーツにしていたことがわかる。

古代ケルトでは祭りは太陰暦に依拠し、一日は夜から始まるとされていたので、現在でいう前夜祭がその開始時期であり、本祭そのものであった。この意味において祭りは夜がふさわしいものであり、ハロウイーンも当然、夜祭りである。異界とこの世が一体化する祭りは、こうして夜に祝われた。そして夜明けとともに厄病を祓い終わると、新しい日が誕生するのである。

ベルティネと春祭り ケルトの伝統を受け継いだアイルランドやウエールズ、スコットランド、イングランドでは、

四月三〇日の夜、ベルティネ祭がおこなわれたが、これは長い冬を凌ぎ、訪れる春を祝う祭りであった。日差しがだんだん強くなっていくこの日は自然の再生を歓迎し、いわゆる男女の結婚を祝う日でもあった。ベルティネ祭は昔では太陰暦の満月の日に、火をシンボルにしておこなわれた。

ケルトのベルティネは「明るい火」または「美しい火」といわれ、現代の暦では春であるが、ケルト暦というと夏の到来を祝う日であった。したがってこれは、キリスト教の「聖ヨハネの日」と同様、「ドルイドが二つの火をたき、動物たちをその火のあいだを追って通す豊穡の魔法の儀式があった」（『ケルト神話・伝説事典』）といふ。かれらはこうして家畜の健康と繁殖を祈願したのである。

ベルティネの習俗は近代まで、アイルランドにおいてキリスト教にデフォルメされて受け継がれていた。たとえばこの夜には、キリスト教化されたケルトの伝説では、「悪魔ロペール」が登場し、自然災害をひき起こしたり、人びとに危害を加えたりするとされた。また霊、妖怪、魔女が出現するというので、人びとは火を燃やしてそれを追い払った。さらに教会は夜通し鐘を鳴らして、この日の悪霊を撃退したという。

なおシェークスピアの『夏の夜の夢』は、本来はマーデーの前の晩のベルティネ、いわゆる四月三〇日のヴァルプルギスの夜祭りが舞台である。ここには古代のケルト的な祭りの世界が展開されている。事実、この作品のドイツ語訳は『ヴァルプルギスの夜の夢』Walpurgisnachtstraumである。しかし原題が A Midsummer Night's Dream となっているので、ケルトの祭りの時期を知らないとき大きな誤解が生じてしまう。

日本では英語の「直訳」から、これはふつう夏至祭の時期の話と理解されており、大部分の人びとはそう信じている。そのうえ明治時代には、坪内逍遙がこれを『真夏の夜の夢』と訳したので、さらなる曲解が生じた。というのは、それによって時期は夏至よりさらにあとの盛夏というイメージが定着してしまったからである。ただし筆者

が主張しているのはこの祭のルーツであって、たしかに北欧では、ヴァルブルギスの夜祭りが夏至祭の前夜祭となつてるところもある。

シェークスピア戯曲でも、夜祭りの日にかがり火を焚く、そしてそこへ妖精が登場するという異界とのかかわりが描写されている。とくにロビン・フッド・フェローは、シェークスピア劇では半妖精として登場するが、それは角を生やして存在感を示し、ダンスの中心部にいる。松明たいまつをもっているところから、夜祭りの登場人物であることがわかる。

したがってこの妖精伝説は、われわれがテーマとしているケルトの祭り（四月三〇日）がベースになっていることは疑いえない。まさしく祭りの夜、異界が口をあけ、箒に乗って飛んできた不思議な妖精がドンちゃん騒ぎをするという展開になっているのである。

四月三〇日の夜祭りは、アイルランドやスコットランド、ウェールズだけでなく、もともと大陸でもおこなわれていたが、とくにドイツやスウェーデン、リトアニアでは魔女伝説と結びついたかたちで残っている。これらの地域はキリスト教化されたのが遅かったので、異教の祭りの伝説が後の時代まで継承されてきた。とりわけドイツのハルツ山岳地方に残る、ヴァルブルギスの夜祭りが有名である。

## 二 ヴァルブルギスの夜祭りと魔女狩り

ヴァルブルギス伝説 ドイツのハルツ地方のブロッケン山には妖怪現象が起きたので、五月祭の前日にあたる四月三〇日には各地から魔女が集い、サバトを開いていたという伝説が現代にまで伝わっている。この山は標高一一四



図3-2 魔女の飛行

(Grip, Hans-Gunther: *Harz Mythologie, Märchen und Sagen*)

二メートルで、山頂には岩がゴツゴツ飛び出した「魔女の踊り場」があり、一年のうち三分の二は霧に覆われている。ブロッケン山の妖怪現象は、科学的には霧と太陽光線の屈折によるものとされているが、そのような不気味な気象は、現在でも起こりうる。事実、筆者が登山したときにも霧が出て、類似現象らしい神秘的な光景が出現した。有名なヴァルブルギス伝説は、魔女迫害の時代以前からまことしやかに信じられていた。ブロッケン山の伝説は一四世紀ごろから記録にあらわれるが、この伝説の絵として、一六六八年に描かれた「ブロッケン山のサバト」が残っている（一六六ページ図参照）。しかし魔女狩りの時代では、現実の魔女狩りと二重写しになるので、伝説が中断された期間もあったけれども、一九世紀終わりごろ復活し、現在に至っている。

伝説によれば、魔女は箒やヤギに乗り、各地からこの山頂に集結する（図3-2）。そこにヤギの角を生やした有翼の悪魔がまちかまえているが、これはサバトの主とみなされる。到着した魔女は悪魔の尻にキスをし、悪魔との契約

## 二 ヴァルブルギスの夜祭りと魔女狩り



図3-3 ヴァルブルギスの夜祭り (Hallinger, Agnes: *Die Hexe muss brennen*)

を結ぶが、これは悪魔との結婚を意味する。図3-3では、中央右の魔女たちは処方箋を読みながら、鍋で煮物をつくっている光景が描かれ、そのなかへ薬草、ヘビ、爬虫類がまぜられている。楽士が音楽を奏でると、やがて悪魔と魔女たちは宴会をはじめ、みんなは幼児の肉を食べ、血を飲み、汚濁の食事を楽しむ。

次に音楽に合わせてダンスがおこなわれ、その後、魔女は悪魔と性的な交わりを繰り返す。こうしてサバトのオルギアはクライマックスを迎えるのであるが、その様子は『ファウスト』のヴァルブルギスの夜祭りに描写されているので、世界的に有名になった。戯曲では、メフトフェレスに誘惑されたファウストは、自分の子どもを身ごもった恋人グレートヘンを見捨て、夜祭りに参加した女性と官能的な踊りにうつつを抜かす。その時、女性の口から赤いネズミが飛び出す幻想を見て、捨てたグレートヘンを思い出すという展開になっている。

伝説にもとづいて、現在でも麓のヴェルニゲローデ、シールケ、ゴスラーなどの町では、ヴァルブルギスの夜

祭りが祝われる。ここでは夜に松明行列がおこなわれ、魔女の仮装大会、屋台の店開き、ダンス、コンサートなどの各イヴェントによる大騒ぎが繰り返される。さらに真夜中に五月の花嫁が登場し、それを迎えて春の到来をお祝いする。

しかし魔女狩りに対する批判を踏まえ、ジェンダー論から見た魔女迫害のシンポジウムがおこなわれるのは、ドイツらしい光景である。近年、参加人数がだんだん増え、ヴァルブルギスの夜祭りはドイツの春の観光の目玉となっている。麓のヴェルニゲローデから蒸気機関車が山頂まで通じ、これに乗ってプロツケン山巡りも非常に人気が高い。

ではなぜ、ヴァルブルギスの夜祭りという名前が付けられたのであろうか。ヴァルブルギスは、七一〇年にイギリスで生まれたヴァルブルガという女性と深いかわりあいをもつ。彼女は七五〇年に、ドイツで布教活動をしていた従兄弟のボニファティウスに呼ばれてドイツへやってくる。ヴァルブルガは敬虔なキリスト教徒として実績を残し、さらに七六一年以来、ハイデンハイムの修道院の女院長として活躍して七七九年に死んだ。墓は一〇四二年にアイヒテットの聖ヴァルブルガ修道院に建てられ、彼女がそこで眠っている。

死後、八九二年にローマ・カトリックによって聖別されたヴァルブルガは、魔術、ペスト、狂犬病に対する守護聖人として崇められた。そのような経緯から四月三〇日の祭りは、魔女に対する守護として、カトリック側から彼女に因んだヴァルブルギスの夜祭りと名づけられた。しかし別の命名ルーツもあって、この説が全面的に信じられるかどうか定かではない。

ドイツの魔女狩り ベルティネ祭ではもともと女神フリッガ（フレイア）を讃えたが、超能力をもつ彼女は箒に乗

って飛行することができ、ネコを従者として連れていくことが多かった。このイメージはキリスト教化以降、しだいにデフォルメされ、魔女化されていった。同様にネコも魔女の属性とされた。中世の魔女は本来、「賢い女性」という名前で呼ばれ、葉草の知識をもち、医療にも通じた産婆兼女医であった。彼女たちが処方した薬の材料は樹木としては、白樺、サンザシ、草としては、クルマバソウ、マリアソウ、マンドラゴラなどが知られている。

ではなぜ「賢い女性」が教会から疎んじられ、弾圧の対象となっていたのであろうか。女性が民衆の信頼を受け、彼女の知識や能力が教会より上回っていた場合、教会の権威を失墜させられる可能性があるからである。ローマ・カトリックは異教の神々に対しても、同様なスタンスをとった。ハイネは『神々の追放』のなかで、キリスト教化以降の追放された神々の姿をイローニッシュに描写したが、また柳田国男もヨーロッパの妖精をデフォルメされた「神々の末裔」と規定している。

この節では、魔女狩りの事例を来訪神信仰とのかかわりあいから考察してみようと思う。ドイツの魔女狩りのなかで、ヴァルブルギスの夜祭りに参加したという各で処刑された女性の例をまず、エーベルハルト・レープリヒの『魔女の生活』に依拠して取り上げておきたい。ハルツ山地の南端に位置するノルトハウゼン出身のアンナ・ペリンガーが、一五七三年二月二日に逮捕された。嫌疑は魔力によって隣人のニワトリに魔法をかけ、卵を産まないようにしたというものである。

彼女が嫌疑を否認したので、親指詰めの拷問にかけられた。拷問がエスカレートしていき、苦痛のあまり、彼女は悪魔との交流を白状した。それによると、竜の姿をした悪魔が羽根飾りのついた帽子をかぶってあらわれ、性的な交わりをすれば定期的に金を与えるという経済的な援助を申し出た。金が不足していたので、アンナはそれを受けることにしたが、悪魔は美しい若者の姿に変身して、黒い服を着てあらわれた。かれの性器は角のような形をし

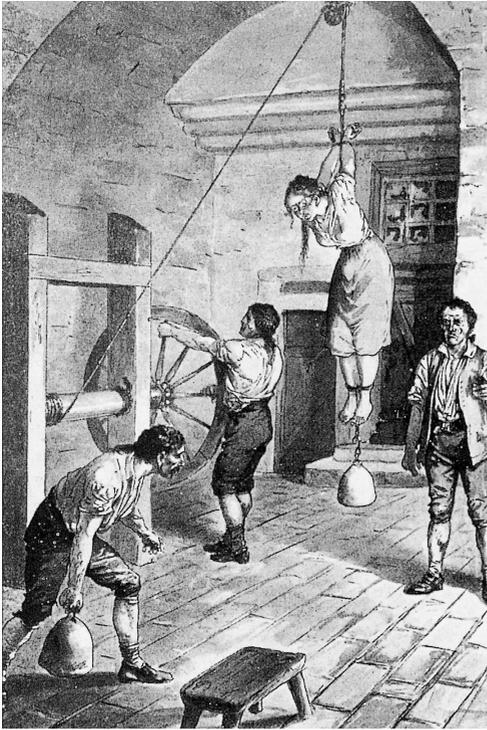


図3-4 拷問にかけられる魔女

(Kerrigan, Michael: *Der Instrumente der Folter*)

て冷たかった。行為中何もほとんど話さず、性の交わりの後、彼女は六ゲロツシエンもらった。

あるとき悪魔はルシファアの姿であらわれ、いっしょにプロツケン山のヴァルブルギスのサバトへ参加することを提案した。かれは白いヤギを遣わすので、何もいわずまた神のことも考えずに、それに乗って頂上へいくように指示した。彼女は頂上へ着くと、楽士が音楽を奏でており、それに合わせてみんなと踊った。悪魔は別の女性をかれのヤギに乗せ、谷の方へ連れていったので、彼女は何時間もかけて、山を下って自分で家へ帰らねばならなかった。

アンナ・ベリンガーは自分の白状が命にかかわることであるのを知っていたが、非人間的な拷問の痛みを逃れるためには、これしか方法がなかったという(図3-4)。裁判調書には

「この告白により、彼女は何ヶ月にもわたる悪魔との姦淫のため、喜んで火刑に処せられた」とある。(『魔女の生活』参照)

もう一件、パターン化した魔女狩りの事例を確認するために、別の事例を取り上げてみたい。一六四四年に、クベドリンベルク出身の七三歳の老婆が魔女の疑いをかけられた。マルグレーテ・シエンフェルトと

## 二 ヴァルブルギスの夜祭りと魔女狩り



図3-5 天国から落下するルシファ  
(ローラ・ウォード・他『悪魔の姿』)

いう一人暮らしの老婆は、共同体から距離を置いて暮らしていたので、村人から胡散臭く見られていたからである。密告によって逮捕され、サバトに対する訊問のなかで彼女は、ブロッケン山のことは知らず、そこへいったこともないと答えた。裁判官は彼女が何か秘密を隠しているに違いないと思ひ込み、高齡であったけれども拷問にかけた。その結果、マルグレーテはどうとうブロッケン山へたびたび出かけ、頂上で魔女たちとダンスをしたと白状した。供述によると、悪魔は帽子に巨大な羽飾りをしてあらわれた。悪魔はハインリヒといい、足が麻痺していた。この祭りのときだけ、彼女は悪魔と交わった。拷問による強制的な告白の後、彼女はもはや生きながらえることができなかつた。

以上の二例とも典型的な魔女の冤罪であるが、魔女狩りの時代においては、ほとんど同じパターンによって無実の女性たちが処刑されていった。この事例からわかるように、ブロッケン山の伝説が固定観念になっており、審問官は俗説のイメージどおり、誘導訊問によって被告を魔女に仕立て上げている。ここでは来訪神信仰をルーツとするサバト伝説が魔女狩りと結びつき、魔女弾圧に転



図3-6 サバトとヤギ、ゴヤ  
(Hallinger, Agnes: *Die Hexe muss brennen*)

化していることがわかる。

なおマルグレーテの悪魔の足が麻痺していたという供述は、墮天使ルシファが天国から落下したとき、地上で怪我をしたという故事にもとづいている(図3-5)。また魔女狩りではヤギと悪魔が定番になっているが、ヴァルブルギスの夜祭りで悪魔が変身したヤギとサバトとのつながりは、どのような経緯で生みだされたのであろうか。

サバトとヤギ サバトはもともとユダヤ人の安息日を意味した。その語源は、ユダヤ教の安息日にあたる土曜日(イタリア語 *sabato*、英語 *Saturday*)に由来する。キリスト教では日曜日が礼拝の日であったが、ユダヤ教では土曜日なので、この違いから、サバトという名称にはユダヤ教に対する敵意が認められる。すでにヴァルブルギスの夜祭りで述べたように、ヤギは悪魔のシンボルとされ、悪魔が変身したものとみなされてきた。



図3-7 ヤギの悪魔化  
(Bärtsch, Albert: Holzmasken)

サバトにはヤギが中心になり、魔女がそれを取り巻いてどんちゃん騒ぎをおこなうと信じられていた(図3-6)。また魔女がヤギに乗ってサバトへ飛行する図がよく描かれている。前述のように魔女はヤギの姿をした悪魔にくちづけをし、契約を結び、悪魔と交わるとされた。ここでもわかるように、ヤギはさわめてネガティヴな動物として描かれていたのである。

こうしてキリスト教では、ヤギは悪魔の動物とされた(図3-7)が、なぜこの定説が生まれたのであろうか。ヤギは粗食に耐え、荒地や砂漠のわずかの草木でも育つ。古代のメソポタミアでは紀元前七〇〇〇年ごろから家畜化され、砂漠地域の人間の生活には不可欠な動物にはかならなかった。

人びとはヤギ乳、チーズ、ヤギ肉、ヤギ皮としてヤギの恵みを利用した。この有用性と生命力溢れるヤギは、古代では神聖視され、崇められていた。ただし発情期のオスは獰猛になり、群れの統率を乱すので、ふつう牧畜民は生後数ヶ月してからオスを屠畜した。これがユダヤの生贄のヤギの儀礼につながったといわれている。

『旧約聖書』の「レビ記」一六章、七節以下には、ヤギはおよそ次のように書



図3-8 バフォメット

(ローズマリ・エレン・グィリー『魔女と魔術の事典』)

かされている。まず二頭の雄ヤギを選定し、一頭を生贄に用い、他のヤギを「アザゼルのヤギ」として荒野に放すものとする。それから贖罪のヤギを殺し、その血を聖所を清めるためにかける。次に荒野のヤギを捕まえ、その頭へ手を置き、イスラエルの人びとの罪をヤギに告白して移した。こうしてヤギに罪を負わせた後、荒野に放った。

『旧約聖書』のユダヤ教の習俗は、ヤギが罪を負った動物であるともなしたので、これが後にヤギのネガティヴ化の理由のひとつとなった。「生贄の山羊」の儀礼は、『新約聖書』以降、キリスト教には継承されていないが、ユダヤ教を批判したキリスト教徒は、さらにヤギを悪魔と結びつけ、ネガティヴ化を深めていった。その際、ヤギの放浪する特性は、定住のキリスト教会においては、放浪芸人やユダヤ人と同様、得体の知れないものとして、差別の対象となっていくのである。

さらにヤギは生命力のある好色な動物とみなされてきた。たとえばこの生命力を神格化したのが、エジプトのアモン、クヌム、ギリシヤのパンであるが、古代ローマのルベルカリア祭、ディオニユス祭にも角をもつヤギの仮面が用いられた。古代においては有角の仮面は、来訪神のシンボルとみなされ、崇拜の対象と

されたからである。しかしキリスト教はこれらの異教の儀礼を否定し、あわせて『旧約聖書』の「生贄の山羊」の連想から、ヤギをデフォルメしたり悪魔化したりした。

ヤギのネガティヴ化はさらにテンプル騎士団にも結びつけられていった。十字軍の遠征のときに成立したテンプル騎士団は、裕福な資産を保有したので、フランス王フィリップ四世（一二六八—一三二四）によって異端として弾圧された。その騎士団が秘密の礼拝所で信仰していたのがバフォメットであり、ヤギの角と蹄をもち、両性具有とされた（図3—8）。

バフォメットという名称は、イスラームの始祖 Mohammed の誤記という説もあるが、これにはイスラームを悪魔と結びつけ、ネガティヴ化する意図が隠されている。その後も、魔女がバフォメットを崇拜するとされ、これはキリスト教では異端のシンボルであり続けた。その延長線上に先述のサバト伝説が位置づけられる。

以上のようにヨーロッパにおいては、角信仰がデフォルメされ、ヤギがネガティヴな悪魔のシンボルとされてきたことがわかる。聖ニコラウス祭のクランプスもこのような伝統のもとに形象化され、それゆえ不気味さを増幅させてきたといえよう。

史実のサバト カルロ・ギンズブルグの『ベナンダンティ』によると、魔女狩り以前や同時代にも、北部イタリアの山岳地域で「ベナンダンティ」と呼ばれる魔術師が夜に集まり、豊穣儀礼をおこなっていたという記録がある。その概要は次のように述べられている。

ベナンダンティは四季の斎日の木曜日の夜に外出する。これは古代の農耕歴に起源を持ち、やがてキリスト教

曆に取り入れられた祭礼日で、四季の危機を表している。つまり古い季節から新しい季節へ移り変わる危険な日で、後日、種まき、収穫、刈り入れ、ぶどう摘みなどが行なわれるのである。そこでペナンダンティは村落の繁栄のもととなる農産物を、魔女や魔術師から、つまり大地の豊饒をひそかにおびやかす力から守るために外出する。「そしてもしおれたちが勝ったら、その年は豊作で、負けたら飢饉になる」。(竹山博英訳)

妖怪との戦いは北東部イタリアのフリウーリだけでなく、スイス、チロル地方でもおこなわれていた。ギンズブルグは、これらの地方の春祭りが、「美しいベルヒタ」と「醜いベルヒタの戦い」の習俗と類似したものであったと指摘している。ペナンダンティは、ヨーロッパでおこなわれていた春を迎える農耕の豊穰儀礼であったといえる。

しかし季節の変り目の日の夜会には、一種の来訪神としての魔術師があらわれるので、村人はそれに力づくで対抗しなければならぬ。この一種の競技化された祖霊との祭りは、一六世紀当時の魔女狩りが始まっていた時代の当局にとっては、魔女のサバトに見え、参加した人びとを魔女裁判にかけていったのである。

したがって魔女のサバトは現実には存在しなかったが、季節の区切りに設定されていた夜祭りがオルギアをともなっていた場合、魔女のサバトそのものに仕立て上げられたといえる。こうして当局と教会は、異教的特徴をもつ祭りを排斥し、ネガティブなイメージを植えつけていったのである。それにもかかわらず民衆は、祭りのオルギアを容易に放棄しなかった。たとえば五月祭の時期に、イギリスでおこなわれるモリスダンスについて、アンソニー・F・アヴェニの『ヨーロッパ祝祭日の謎を解く』では次のように述べられている。

季節が変化する節目には、必ずその直前に奇行が伴ってきたようだ。十五世紀頃からイギリス民衆の間に流行

したモリスダンスは、元旦に対する大晦日のどんちゃん騒ぎに相当する。模型の竜や馬にまたがってネッカチーフを振り回し、パイプを吹いて太鼓を打ち鳴らすエネルギーシユなモリスダンスの踊り手たちは、この踊りに批判的な人々からは悪魔的な異教行為の担い手とみなされている。（勝貴子訳）

これはサバトではないが、ベルテイネ祭の系譜に属する祭りであり、オルギアの要素を含んだものである。キリスト教からはこの祭りも否定的にみられたが、民衆は春祭りのオルギアというプロセスを経てはじめて、共同体の再生をはかることができるので、代々継承してきたのである。

### 三 五月祭（メーデー）

メーデーと五月柱　メーデーは、現在では労働者の祭典として知られている。しかしそれは資本主義が発達した一九世紀後半以降のことであり、ヨーロッパ、とくにイギリス、そしてアメリカでは、この日が労働契約の切り替えの日であったからである。契約の有利な条件を目指して、かれらは団結して示威行動をおこなったが、これは古来のメーデーと直接関係がない。

五月一日はすでに述べたように、ケルト暦では夏と区分されるが、現在でいう春祭りの日であった。農家の主婦たちが、飲食物を持ち寄ってパーティをする習慣があり、豊作祈願祭の日でもあった。五月祭は本来、女性を讃える祭りでもあって、古代ケルトの女神ブリジッド（後にキリスト教化され聖ブリジッド）の泉に花が捧げられた。

さらにこの日は、北欧の結婚の女神フレイアに捧げられる祭りでもあった。フレイアは帯に乗って空を飛ぶこと



図3-9 空飛ぶフレイア、12世紀(ブルーデンス・ジョーンズ・他『ヨーロッパ異教史』)

でも有名である(図3-9)。メーデーには五月の女王が選ばれ、花がブレゼントされる。フレイザーが『金枝篇』で事例を示しているように、野原へ花摘みに出かけた男女が出会ったり、また実際の結婚がおこなわれたりするシーズンでもあった。この日以降、大地が耕されたので、それはまた女性のシンボルである大地との結婚を意味した。

五月祭はケルトのみならずヨーロッパ全域に、一二世紀ごろから広まっていたことが記録されているが、シンボルとなるのが五月柱である。若者たちは前日か、それ以前に森へ出かけてまっすぐ伸びた白樺を切り出してきた。村や町のなかの祭りのおこなわれる会場にこれが立てられた。祭りのシンボルを奪われないよう

に、若者は交代で夜も五月柱を見張り続けた。この習俗は、現在でもヨーロッパ大陸ではカトリックのアルプス山岳地方に残されている。

五月柱はヨーロッパの樹木信仰と密接にかかわっており、そのなかに宇宙樹神話がある。これにもとづけば樹木が天空、地上、地下という三界を貫いている宇宙の中心であるとされる。このコスモロジーによって、宇宙の根幹が成り立っているというのである。樹木信仰によれば、樹は男性のシンボル、大地は女性のシンボルとみなされた。すなわち五月柱を建てるのは、大地との結婚を暗示し、性の交わりをシンボル化して豊穰を祝う意味が込められているのである。



図3-10 五月柱

(Feilhauer, Angelika: *Feste feiern in Deutschland*)

柱の先端には色とりどりのリボンや旗が付けられ、中・上部には図のようにシルエット板が飾られる（図3-10）。冬の灰色の風景と異なっており、人びとは着飾って五月柱を中心にして踊りながら祭りを祝う。踊りは各地によって異なるが、南ドイツでは五月柱の先端から長いリボンを垂らし、男性と女性に分かれ、右回りと左回りを交互に繰り返して、踊りながら柱のリボンを編むというしきたりもあつた。またその日には力や技をきそつ競技がおこなわれる。この陽気な祭りは、緯度の高いスウェーデンなど北欧では、五月ではなく六月の夏至祭に移されて祭りの並存という現象も起きている。

イングラントの五月祭において、現代でもシカ踊り（ホーングダンス）の伝統が残っている。今ではもちろん昼間の祭りであるが、シカの角を付け、毛皮をかぶってアコーデオンなどの音楽に合わせてグループで踊る。これはケルトの祭りの習俗の残滓であると考えられる。それに注目した宮沢賢治が、岩手でおこなわれていたシカ踊りをテーマにした、『鹿踊りのはじまり』という童話を書いたのは有名な話である。

ケルトにはシカ信仰があつて、もつとも有名なのはケルトの神ケルヌノスである（二五九ページ図参照）。角は春になると生え変わり、再生のシンボルとして崇められた。五月祭にシカのモティーフが用いられるのも、シカが再生のシンボルであつたからである。

同様にイギリスでは同じ時期に、ジャック・イン・ザ・グリーンという緑の木の葉をまとつた人物の集団も踊るが、これも同様な再生の意味を表しているといえよう。人間と樹木との合体は教会彫刻のなかに、グリーンマンとして形象化されている。

古人は人間より優れた能力をもつ動物や植物と一体化する願望をもつていた。角をつけたり動物の仮面をかぶつたり、植物人間になつたりして、そのパワーを取り込もうとした。しかし異教時代の習俗は、キリスト教時代には否定され、排除される運命にさらされた。

**魔女のサバトと五月祭** 先述のヴァルプルギスの夜祭りと五月祭（メーデー）は、あまりにもコントラストをなし、対照的な明暗を分けた祭りの世界が展開されているような印象を受ける。しかし祭りの基本構造は、すでに触れたように日本や他の地域の来訪神信仰と類似している。事の状況を複雑化させているのは、一神教であるキリスト教が介在しているからである。では四月三〇日と翌日の五月祭は、どのような関係にあるのだろうか。

まず祭りの前夜祭に妖精や魔女が登場するが、これは日本のナマハゲや先祖霊と同様な異界からの霊と考えられる。魔女も以上の説明でわかるように、結婚の女神（フリッガ、フレイア）がキリスト教的にデフォルメされているだけであり、本来はポジティブな来訪神信仰であつたことがわかる。

ヴァルプルギスの夜祭りは婚禮の祭りであつて、人びとは夜祭りに出かけ、動物に扮したり、植物に変装したり

して、来訪神とともにダンスをしたが、これは本来、来訪神との接触・交流を意味した。そのプロセスを経て、大地は恵みを与えてくれるのであった。それはメーデーの五月柱の男性のシンボルであるポールを、女性のシンボルである大地に打ち立てるといふ、性交の儀礼によって示される。したがって前夜祭は一種の夜の豊穣信仰であり、そのために次の昼の五月祭が設定されていたのである。

さらにバーバラ・ウォーカーによれば、「フレイアは肥沃、愛、月、海、大地、冥界、死、誕生、処女、母、祖先の女神、天界の女王、運命、星、魔法の支配者と呼ばれた」（『神話・伝承事典』）という。きわめて多様な特性をもつ北欧の女神は、北方のケルトやゲルマンの人びとにとって、絶大な人気を誇っており、南方の地中海地域のヴィーナス（アフロディテ）に匹敵するものである。

しかしキリスト教から見れば、異教にもとづく来訪神信仰は容認しがたいものであった。それでも中世の宗教的に安定した時代であれば、異教的な要素は黙認できたが、近世初期のカトリックとプロテスタントの宗教的確執、三〇年戦争、中世と近世の世界観の対立のなかでは、エキセントリックになった教会と世俗の権力は、来訪神信仰をも魔女狩りと結び付けた。とりわけ豊穣をつかさどる前夜祭は、魔女のサバトとみなされ、批判と弾圧の対象になった。事実、女神の来訪神はネガティヴな魔女に貶められ、排除されていった。ヴァルプルギスの夜祭りが復活したのは、魔女狩りが終焉した一九世紀になってからである。

それにひきかえ、キリスト教的視点から見ても、土着の五月祭は無害なものと判断され、それほど危険視する必要がなかった。だから翌日の五月祭は黙認されて、本来の春祭りの特性を色濃く残しながら、ヨーロッパ各地で継承されてきたのである。

参考文献

- アンソニー・F・アヴェニ 『ヨーロッパ祝祭日の謎を解く』 勝貴子訳 創元社 二〇〇六年
- バーバラ・ウォーカー 『神話・伝承事典』 山下圭一郎・他訳 大修館書店 一九九〇年
- ローラ・ウォード・他 『悪魔の姿』 小林純子訳 新紀元社 二〇〇八年
- ローズマリ・エレン・グイリー 『魔女と魔術の事典』 荒木正純・他訳 原書房 一九九六年
- カルロ・ギンズブルグ 『ペナダンテイ』 竹山博英訳 せりか書房 一九九六年
- ミランダ・J・グリーン 『図説ドルイド』 井村君江監訳 東京書籍 二〇〇〇年
- アーサー・コットレル 『世界の神話百科』 ギリシャ・ローマ 北欧』 村松一人・他訳 原書房 一九九九年
- ブルーデンス・ジョーンズ・他 『ヨーロッパ異教史』 山中朝晶訳 東京書籍 二〇〇五年
- 二一世紀研究会 『民族の世界地図』 文春新書 二〇〇〇年
- 浜本隆志・他編 『ヨーロッパの祭りたち』 明石書店 二〇〇三年
- ジェームズ・フレイザー 『金枝篇』 (一一五) 岩波書店 二〇〇三年
- Bartsch, Albert: Holzmasken, Schweiz 1993.
- Falhnauer, Angelika: *Feste feiern in Deutschland*, Zürich 2000.
- Fischer, Anke: *Feste und Bräuche in Deutschland*, München 2004.
- Gloger, Bruno, u.a.: *Teufelsglaube und Hexenwahn*, Wien 1999.
- Grip, Hans-Gunther: *Harz Mythologie, Märchen und Sagen*, Goslar 2002.
- Kerrigan, Michael: *Der Instrumente der Folter*, Baden-Baden 2001.
- Loblich, Eberhard: *Hexenleben*, Halle 2001.
- Hallinger, Agnes: *Die Here muss brennen*, Augsburg 1999.